

第三号

「修業」

メルマガ《noichi》第三号、今回のテーマは「修業」のお話。
長い伝統と見事な技術が集約された職人・芸人は、誰しもが必ず修業時代を経ます。尤も、道のり長く険しい世界において修業に終わりはないですが、ここでは、一般社会に同じく、「研修期間」を設けてお仕事のノウハウを学ぶ、研^{みや}ぎ、修^{おそ}めるある一定の期間を「修業」と称し、スポットを当てました。
人は修業時代を通し、生涯を掛けて臨んでいく為に必要な基^{もと}を作っていきます。

京都の番傘職人の、その見事な技術に惚れ込んだ外国人が、見物するだけでは飽き足らなくなって熱心に弟子入りを志願した。最初は「無理や」と相手にしていなかった職人も、二たび三たび訪ねてくる外国人の熱意に根負けして、どんな厳しい修業も耐え抜くことを条件に弟子入りを認めた。しかし、いざ修業の日々が始まってみると、修業生活は毎日変わり映えのしない、いわゆる平凡なもの。日の出前の起床、新聞の取り込み、掃除、洗濯、買い出し、食器洗いから夜な夜なの事務雑事まで・・・そこには番傘のバの字もない日課をただただ繰り返すだけの退屈な日々であった。いつか教えてもらえるだろう、いつか触れさせてもらえるだろうの一途な思いだけを頼りに三ヶ月が過ぎ、いよいよここが我慢の限界と思った弟子は腹を決めて、親方に思いのたけを直訴する。「親方、ジブンにもできません。やらせてください。」「オマエ、たった三ヶ月足らずで何を言うておるか。そんなハナタレ小僧は、さっさと帰れ帰れ。」

カーッと頭に血がのぼった弟子は親方に捨て台詞を吐いて、そそくさ荷物をまとめて出て行ってしまった。

物事を合理的、端的に考える外国人にとって、技術を習得出来ない修業の日々はさぞ焦れつたく、理不尽に映ったことであろう。外国では、日本人の不合理さを象徴とする一つの笑い話になるのかもしれない。しかし、ここでいう修業の真意は、技術以上に心の鍛錬を重んじるもの。それに気が付くだけの姿勢が弟子に欠けていることを象徴する一つの教訓として、職人の世界で生かされているかもしれない。

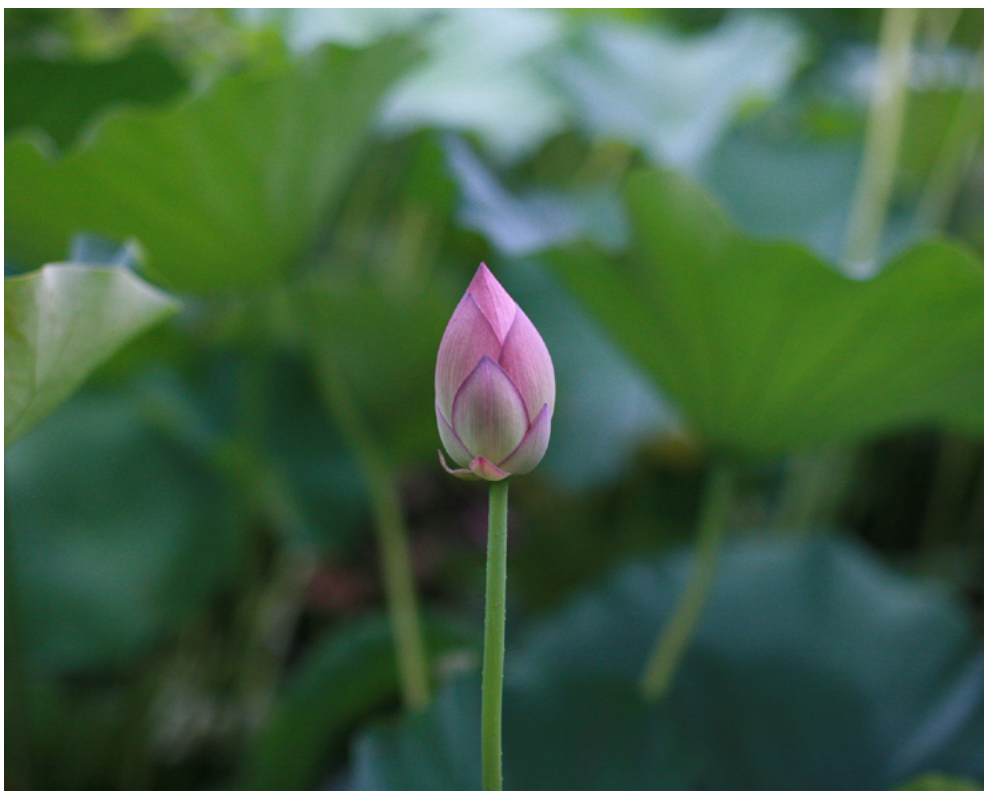
「シュギョウ」

新内師演奏家 新内剛士

以前、同業者である父の「シュギョウ」時代について聞いたことがある。父は、中学の頃から実叔父にあたる師匠の元へ住み込みで享受を受けたそうだ。つまり、現代にはあまりみられない内弟子という形で「シュギョウ」に励んだわけである。掃除や洗濯、家事はもちろんのこと、師匠の身の周りの世話を全てしたそうだ。そして、その代わりに芸を教えてもらうのかと思いきや、師匠が父に直接稽古をつけたことはほとんどないという。芸は盗んで覚えるものと昔から言われてきたが、父の師匠が他の弟子に教えているのをその場で聴いて学ぶことが多く、師匠が寝静まり、夜な夜な押入れの中で譜面のような覚書をしていると、師匠のお上さんに怒られて、記録資料はほとんど残せなかったそうである。親類だからといって私生活の上での甘えも一切なく、逆に厳しく接せられた内弟子時代の話を聞くと、今の自分には考えられないような過酷な状況で芸を習得したということが分かる。しかし、その過酷な状況が芸を身につけるということのアンテナを敏感にさせたのではないか。だから、「シュギョウ」と聞くと、どこか過酷さを踏まえたものであり、見返りを求めない精神の研ぎすまされた状態で行うものという印象が強い。

また、父の「シュギョウ」時代の話から、伸び盛りの時期に、芸以外のことに邁進せざるを得ない状況は嫌にならなかったのかということ、なぜ新内の世界に入ろうと

したのかということを探してみた。すると、とにかく三味線を一日中弾ければそれで幸せだからという一つの答えが返ってきた。何の躊躇もなく返答されたので、私は啞然とした。そして、恥ずかしながら返す言葉がなかった。見返りを求めないで師匠のそばに居ることによって、身につけるといふことの感性や「シュウギョウ」の能力が培われ、その中で人格の形成も起こり、「シュギョウ」という日常的精神鍛錬や本質の習得が自然のうちになされていたのだ。



芸は何より体感することが一番の上達に繋がるので、いくら頭で表面的に考えても芸の本質を突くことは出来ない。

お稽古から修業へ

表具師 船田春光

同年代の若者が、こぞってカタカナの職業についていく中で、某カメラメーカーの人事課を飛び出した私は、菩提寺の御縁で、真逆の世界に居た一人の表具師に出会い、この道に入りました。鎌倉時代から、変わらぬ伝統技術を踏襲している世界でありながら、師匠は独学で次々に新しい技法を研究していました。神秘的な和紙の特性を生かす未知の手仕事は、柔軟な心を要求され、それまでの安易な合理的な生き方は、ことごとく拒否されました。工程のひとつひとつが新鮮で、理に適っていて、無駄が無く、その日の日の空気をも肌で感じながら、深みにはまって行ってしまうしました。はじめは、「お稽古」の範疇だったのが、瞬く間に虜になってしまい、一生の本職となってしまいました。表具師としての修業は、住み込みの内弟子から始まり、七年間は師匠の家族と寝起きを共にしました。昨日出来なかつた事を、今日は出来る様になりたい、の一心で、夜明け前から一日中没頭したものです。今思えば、師匠に厳しく指導して頂いた事、自分を磨くために一日の全ての時間を使っていた事、それを見守る両親が居た事、私を信頼して下さるお客様が居て下さった事。今年は、殊更、そのどれもが宝物のように有難く感じられます。これ以上辛い時は無い、という大変な時期ほど、後で振り返ってみると、実は至福の時だったりして・・・これ、今だから言えることですが・・・。

*エッセイ「匠のつぶやき」はこちらで見られます。

<http://www1.plala.or.jp/syunkoh/>

後々わかること

三味線職人 小澤 均

修業って何でしょう？ 大事なのは、試す事、失敗する事ですね！ そして何かをつかんでゆく、もしくは、失ってゆく。人生の中でこの繰り返しが続くのです。修業時代はこれが一番、はげしく、落ち込みます。修業時代には、師匠が近くに居ます。どんなに納得できなくても、師匠が黒と言えば「黒」。それでも師匠の言う事を丸飲みにして、白黒を決めてゆく事が大事です。これが分かるまでに二十年かかりました。愚か者です。まあ、一生かかって、何かが見える予定です。最初は一本の木が鋸、鉋、ヤスリで削られ、最後に砥石で磨き上げられる。ツルツルに出来上がった木肌を見ていると、うれしいの一言です。思った様に仕上がらない時、師匠から罵声を浴びせられる時、職人はへこみます。それは理由が分からないからです。しかし後になれば理由が分かります。ありがたいものです。修業時代は不安・心配だらけでした。そんなこんなで三十三年、これからも修行は続きます！

TNBのそれっぽい話3

三味線演奏家 田辺 明

日常生活において何の気なしに聞こえてくる音や音楽に気を留めてみると、音楽的・楽典的にさまざまな発見があったり(なかつたり)します。

「花嫁修業」なんて言って箏を習ったという話を聞いたことがありますが、今日では結婚活動、略して「婚活」。「あなたくとわたくしが 夢の国」と歌われていたのが、非常に現実的な今日この頃。

今回のテーマ「シュギョウ」には二種類あって、「修業」と「修行」があります。「修業」の「業」とは「わざ＝技」

～私たちの演奏会～

フィナーレの家元・中島靖子先生ご作曲の「鎮魂頌」。今回、箏のソロを作曲者が直々に演奏。地元の混声合唱や洋楽の方々の御助演も頂き、盛大かつドラマチックなラストを飾りたいです。又、私達の晴れ舞台、昇格披露では人間国宝・山本邦山先生に花を添えて頂きます。中島一子氏、山本雅楽邦氏も出演。福井でこれだけ贅沢な演奏会が開催されることは、滅多にないことです！

『高橋雅久実追悼箏曲演奏会』

日時：9月23日 13:30 場所：ハーモニーホール福井

入場料：2000円 連絡先：0766-23-4958



お知らせ

奥田麗 個展

九月五日(月)～十日(土)

ギャラリー砂翁

<http://www.jp.in.co.jp/saoh/>

とも読み、漢文訓読するとし点を付けて「業ヲ修ム」、学業や技芸・事業を習い修めて成し遂げるといふような意味があります。職人さんが下積みしているようなイメージですね。

一方、「修行」はというと、「行ヒヲ修ム」、元々は仏教用語で、「善行を積み仏道に励むこと」を差し、どちらかという精神修行の意味合いが強いと思います。お坊さんの滝行や座禅で精神統一するイメージですね。

つまり、「修業」は肉体的で一定の目処があるのに対し、「修行」は精神的で終わりが無いのです。音楽にはどちらの要素もあると思います。お稽古に行つて暗譜するまで修業し、本番に向けて修行します。私の好きな演奏家でもある山田流箏曲家中能島欣一氏(1904-1984)は、「千段弾き」といつて箏曲「五段調」「六段調」「七段調」「八段調」「九段調」(計三十五段)を千段(1000÷35≒30回以上!)、十時間以上にも亘つて弾いたといひます。

邦楽英単語講座・その三：シュギョウを英訳するのは難しい。

Training



Illustration : urara okuda

◎あとかぎ◎

物作りの現場でも、作家になりたいという人は多いけれど、丁稚奉公してまで職人になりたいという若者はあまりいない。そんな現代においては、修業という言葉の意味が昔とずいぶん違ってきていると思う。ぼくも若いころは、年上いろいろな言われるのがいやだった。言われても無視していた。だからできるだけ、今の若い人は、とは言いたくない。言わないようにしている。それでもあえて若い人にアドバイスするのなら、「あまり疑問をもたないで、黙ってついて行きなさい」ということ。この人に学ぼうと決めたなら、納得できない事でも鵜呑みにして、十年二十年と愚直に做ってみるといい。そんな素直な人(別の言い方をすれば、馬鹿正直な人)こそがいつの間にか、周囲を圧倒するような高みに達していることが多い、というのが、なかなか素直になれなかつたおじさんの実感なのでした。

グラフィックデザイナー (http://www.1938.jp) みやはらたかお